平成30年度第4回　京都市市民参加推進フォーラム　摘録

■開催日時：平成31年1月29日（火）　午後6時30分～午後8時30分

■開催場所：職員会館かもがわ3階　大多目的室

■議題：
（１）施策1，4，5，6，8の進捗管理について
（２）「計画を着実に進めるための推進体制」の進捗状況について
（３）平成30年度市民公募委員サロンの実施結果等について

■報告事項：
（１）新たに設置された附属機関等について
（２）市民参加に関係する新しい事業や取組について
（３）市民参加推進フォーラム公募委員の募集について

■公開・非公開の別：公開

■出席者：
市民参加推進フォーラム委員9名
（池田委員，内田委員，大鳥井委員，兼松委員，佐々木委員，菅谷委員，杉山委員，ハッカライネン委員，壬生委員）

■傍聴者：2名

■特記事項：
動画共有サイトYouTube（ユーチューブ）を利用し，後日，音声配信を実施する。

【議事内容】
１　開　会
＜事務局＞
はじめに，本日の委員の欠席状況についてだが，金田委員，桜井委員，篠原委員，森川委員，山野委員，吉岡委員が欠席である。出席委員が委員の過半数を超えており，会議は成立となるので，開催させていただく。
会議の摘録については，後日ホームページで公開するとともに，会議の音声を後日「ユーチューブ」で配信するので御了承いただきたい。

では，以後の議事進行は杉山座長にお願いする。

２　座長挨拶

＜杉山座長＞

早速，事務局から議題と本日の流れについて説明をお願いする。

＜事務局＞

（議題の説明，資料確認，時間配分について説明）

３　議題

議題（1）施策 1，4，5，6，8 の進捗管理について

＜杉山座長＞

議題 1「施策 1，4，5，6，8 の進捗管理について」に入りたいと思う。まずは施策 6 について一旦議論を行い，その後，その他の施策について議論したいと思う。まずは事務局から資料の説明をお願いする。

＜事務局＞

（資料 1「「第 2 期京都市市民参加推進計画改定版」の進捗管理（案）」説明）

＜杉山座長＞

フォーラムの役割は計画の進捗管理であり，平成 32 年度の計画改定までの間に進めるべきことは何かということを話し合っていきたい。

今年度はこれが最後の会議になる予定である。資料 1 の 2～3 ページの「フォーラムとしての意見（案）」について，修正や付け加えるべき点があれば，話し合って決めていきたい。

＜壬生副座長＞

P2 の意見 1「市政参加の認知度と意識について」の，フォーラムとしての意見案だが，文末が分かりにくい。若者に市政情報を伝えるには大きく 2 つの方法があり，「違いを意識する必要がある」で終わっているが，「違いがあり，その違いを理解した上でうまく使い分ける必要がある」とまで書いた方がしっかり伝わると思った。

また，「個人に対して個別に働きかけていくことが重要である」については，我々はフォーラムでの議論を聞いているのでイメージしやすいが，その意見だけを読んだ人はどういうことを言っているのかが分かりにくいのではないか。

＜杉山座長＞

違いを意識する必要があるというだけではなく，「組み合わせて使っていく」というとこ

まで踏み込んで書いてはどうかという御意見である。
　また，「個人に対して個別に働きかけていくことが重要である」という書き方は，分かり辛いのではないかという御意見である。

＜内田副座長＞
　後者は，森川委員の発言で出てきた意見だったと思う。学生が授業等で地域のまちづくり活動に入ってきた時に，大人が直接声かけをして働きかけていく必要があるという流れの中で出てきた意見だったかと思う。

＜菅谷委員＞
　様々な地域で行われている活動に学生が入ってきており，学生自身は興味を持って活動しているので，地域にうまくつないでいってあげる必要があると思う。漠然と「まちづくり」という形で声かけするよりは，より具体的に「こんなテーマで活動していますよ」など，地域の課題等を明確に出して声かけできれば，もっと前向きに取り組んでもらえる気がする。

＜大鳥井委員＞
　「個人に対して個別に働きかけていくことが重要である」という意見は，学生や若者は市政参加制度等について全然知らないので，知ってもらうためには身近な大人が直接声をかけないと気づけない，という話もあったと思う。

＜佐々木委員＞
　そういったことは全て議事録に書いてあり，そうした意見からこの意見案が生まれているので，議事録からつながれる形になると分かりやすいと思う。

＜兼松委員＞
　意見３「大学との連携について」の「気が付けば市政参加をしていたという仕掛けをできればよい」についてだが，一番大事なポイントは，「主体的に関わろうとする学生はほとんどいないので，きっかけはこちら側がつくらざるを得ない」という点である。無茶振りすればやるかもしれないが，無茶振りする人がいないという現状がある。

＜ハッカライネン委員＞
　私はユースサービス協会へのヒアリングで，ユースカウンシルを作ろうとしているという話を聴いた。いいアイデアだと思う。京都市も一緒にできないかと思ったが，市にそうした考えはないのだろうか。

＜杉山座長＞
　そういうような取組を，どんどんやっていこうということがフォーラムの意見に成りえることだと思う。
　「個人に対して個別に働きかけていくことが重要である」には，主語をつけてみたらどうか。「関わってもらいたい大人が」や，「参加してもらいたいと考える主体者が」などつけると，もっと意味がはっきりするのではないか。

＜兼松委員＞
　「働きかけていくこと」が重要なのか，「働きかけていく意識をもつこと」が重要なのか。そこも，どこまで書くのがいいのだろう。

＜菅谷委員＞
　地域には，本当に色んな学生が入ってくる。修論や卒論のテーマにしたいというきっかけで入ってくる方が多い。そうした学生に，まちの委員会に関わってもらい，地域側は学生たちの軽快さなどを学習させてもらい，地域の情報を提供して，人とつないであげるといったことをしている。また，地域でやっていることの一端を担ってもらう。そういうことをしていると，また色んな学生がくる。

＜杉山座長＞
　そうした，顔の見える働きかけというのは，非常に有効な気がする。
　漠然と来る学生に対して，何か動機を与えてあげることでより関わりやすくなるということかと思う。「個人に対して個別に働きかけていくことが重要である」をもう少し詳しく書くということにしよう。

＜ハッカライネン委員＞
　確認だが，「フォーラム意見（案）」はこれで決まっているものなのか。あとはどう表現するのか，ということだけが議論対象なのか。

＜杉山座長＞
　ここに挙がっているのはこれまでの会議で出た委員の発言を基に作成された事務局案である。「こういうことも加えたらいいのではないか」ということを発言いただいても大丈夫である。

＜ハッカライネン委員＞
　承知した。意見案には，具体性が無いと思う。具体的に何をするのかが見えない。

＜内田副座長＞
　それは，全ての意見案についてだろうか。

＜ハッカライネン委員＞
　そうである。受け身の表現が多く，誰が責任を取ってやるのかが分からない。そもそも，誰が何をするのかが分からない。市への意見というのは，こういう書き方が一般的なのだろうか。

＜兼松委員＞
　あまり具体的に書きすぎると，逆に実行する内容をせばめてしまう可能性もでてくる。やって欲しいことがあれば，ちゃんと言った方が次につなげやすいという部分はある。

＜ハッカライネン委員＞
　これは誰が読んで，アクションを起こすのだろうか。

＜杉山座長＞
　これは行政である京都市に向けての提言になる。

＜事務局＞
　本日の議論内容を踏まえて資料１の一番右の欄の「フォーラムからの意見（案)」を整えたのち，案をとって，「フォーラムからの意見」として庁内周知したいと思っている。これまで審議いただいた中身が凝縮されているので，この形で周知していきたいと考えている。

＜杉山座長＞
　では，より踏み込んだ形で記載してもよいということか。たとえば先ほどの部分に関して言うと，「まちづくり活動に参加をしてもらいたい人は，活動の趣旨やテーマを伝えるなど，若者個人の関心を高めることが大事である」などと付け加えてもよいのだろうか。

＜事務局＞
　先ほど「主語をつければよいのでは」という意見があったが，京都市に対する意見という形でまとめているので，「京都市が」という主語になると思っていただきたい。
　また，市政参加に関しての施策について議論いただいているので，まちづくり活動に関する施策に対しての意見ではない，ということをお伝えしておく。

＜佐々木委員＞
　若者に市政参加情報を伝えるには，多くの若者に対するものと個別に対するものと，２つ

の方法があるというのは分かったが，「違いを意識する必要がある」という議論はしたのだったか。

＜兼松委員＞

「違いを意識する必要がある」と入れることで，「今まで意識していなかった」ということを反省する意味合いが込められているのだと理解した。

意見５「パブリック・コメントについて」だが，全体的にはこれくらいの分量でいいと思うが，「全てのパブコメ等で大きく変えることは難しいと思うが，若者に関係のあるパブコメを選ぶなど」というような形で，「若者に関するパブコメ」ということを盛り込んでほしい。若者から遠いテーマについて積極的に書いてもらうのは難しい。近いテーマを選ぶ，という事を盛り込むことで，「若者が関心を持つテーマかどうか」という視点が生まれると思う。そこをスタート地点にして，高齢者施策に関するパブコメは高齢者に届くためにはどうすればよいかなど，パブコメを実施する際に市側が「誰を対象としたいのか」をちゃんと意識するようになると思う。

今回まとめた「フォーラムからの意見（案)」に挙がっている内容は，京都市としては想定外の，「これはやっていなかった」という内容なのか，それとも，想定していて手が付けられていなかった内容なのか。

＜事務局＞

意見 1 の「個人に対して個別に働きかけていくことが重要である」については，分かってはいたが，改めてその重要性を認識した。市政参加してほしいと思うと，広報に力を入れることにばかり意識が向くが，「本当の市政参加とは何か」を突きつめて考えると「協働の担い手を増やす」ということであるということを，今回改めて認識した。

また，市政参加してもらうには若者の支援団体ともっと連携することが大切であるということも再認識したことである。行政ばかりで頑張ってしまいがちであるが，協働でやっていくことも大切である。

行政内部でも，組織が大きく，各部署で完結することが多いため，日常的に他部署と連携することは少ないかもしれない。庁内でも日頃から情報交換，共有できる場があればよいなということは，今回改めて認識した点である。

＜内田副座長＞

これまでの議論で，「市政参加とは協働の担い手を増やすこと」という認識が大事な視点として語られてきているので，フォーラムとしての意見案として「取り組んでいく上での方向性を示す」ということも一つ提案させていただきたい。具体的にはそれぞれの部局で取り組んでいってもらうこととして，「市政参加とは，協働の担い手を増やしていく事であるという認識のもと，各部局取り組んでいく」というような形で記載するのはどうか。

＜杉山座長＞
　先ほど「主語は京都市である」という話があったが，私は考え違いをしていた。

＜佐々木委員＞
　主語が「京都市」であるのなら「個人に対して個別に働きかけていくことが重要である」という点については，「では，どうやって？」という疑問がわく。そこまで踏み込めたらいい気はするが，難しい。

＜兼松委員＞
　「様々な団体と協力し，様々な団体が個人に対して個別に働きかけていく事を京都市がサポートする」というようなことではないか。

＜杉山座長＞
　なるほど，そういうことだと思う。
　「個人に対して個別に働きかけていくことが重要である」の前に記載されている「公共に対する意識の転換も必要であり…」についても，京都市が各機関と連携して，若者の意識を変えていくというニュアンスだった気がしている。

＜佐々木委員＞
　「意識の転換」は目的であって，それを達成するための手段として「個人に対して個別に働きかけていく」という形で具体的に記載するのでも，まとまるかなと思う。

＜杉山座長＞
　文章後半で具体性を持たせて，「例えば～も大事だ」というような形でまとめるということと理解した。
　ここまでの議論を整理する。
　意見１については，「多くの若者に対して周知する方法と個別に働きかける方法」の違いを認識する必要があるだけではなく，両方が必要であり，その違いを認識し，使い分けていく事が大事であるということ。公共に対する意識の転換が必要であり，そのためには個別に働きかけていくことが大事だというニュアンスを加える，ということだった。
　意見５は「若者に関係のある」という文言を加える，ということだった。
　何か他に追加などはあるか。

＜大鳥井委員＞
　意見４についてだが，「若者が安心して話せる場」という記載だけでは，どういうことか

分からないのではないかという不安がある。若者は，政治や行政について何か意見を言うことに対して，恐怖感や，ハードルの高さを感じているということを加えてもいいのかもしれない。若者がどういう場を安心して話せる場と言っているのか，ということが，大人側には理解できていない点もあるのではないか。

＜兼松委員＞
「安心して話せる場があればよい」のは，こういう理由である，というように，原因的なことが書かれている方がよく分かる，ということか。確かに，若者らしいリアリティがあった方がいいのかもしれない。

＜大鳥井委員＞
「ハードルが低い方が意見がいいやすい」というような形で，具体的に書いてもいいのかもしれない。

＜内田副座長＞
具体的には，どういうことをハードルが低いと感じるのだろうか。

＜大鳥井委員＞
人によって違う部分もあると思うので一概に言うのは難しい。

＜兼松委員＞
「市政参加とは若者にとってハードルが高いという現状である」と記載してしまうのはどうか。

＜内田副座長＞
安心して話せる場については，審議会のような場であれば，学生の意見を受け止める雰囲気はあるか，大人が学生に発言するよう促して，若者の意見を引き出そうとする雰囲気があるかなど，若者が参加している場の雰囲気をどう整えるかというのも大事だと思う。
今の意見案の書き方は，「学生が集まって話せる場を別に作る」という話になっているので，「既存の市政参加の場に学生の意見を聞きとる姿勢を作ることが求められる」という記載の方がよいのではないかと思う。学生が，そういった場で自分の意見を受け止められたという経験が，市政参加，公共への意識が変わるということにつながっていくのではないかと思った。

＜ハッカライネン委員＞
新しい場も必要だと思う。学生だけが集う場で意見を言うという経験を積んだあと，意

見を受け止めてもらえるような場に実際に出ていくということが大事かと思う。他の人がいても，何でも聞いていい，恥ずかしくないと思える場は必要だと思う。

＜内田副座長＞
　では，そうした 2 つの要素が必要であると書いたらいいですね。

＜ハッカライネン委員＞
　こうした審議会のような場はハードルが高いと感じると思うので，「市民参加塾」のような，誰もが参加できる場があればいいと思う。

＜壬生副座長＞
　私も意見 4 の書き方から，新しい場を作ることだと捉えていた。「委員の関連する発言」欄にあるように，「若者が疎外感を感じている」とか，「遠慮せず話せる場があまり無い」ということであれば，気軽に自分の意見を言える場を作っていくのも大事だと思った。

＜佐々木委員＞
　意見案に挙がっているのは，新しい場を作るなどハード面での書き方に偏りがちな印象である。今出てきたような，若者の意見を受け止めるような発言の仕方などをソフト面で意識すべきこととして付け加えれば，課題への対応策となるのではないかと思う。

＜杉山座長＞
　安心して話せる場も大事だし，会議では，若者の意見をしっかり受け止めるという意識を持つように運営することが大事だというように書き加える，ということとしたい。
　では，続いて施策 1，4，5，8 について事務局から御説明いただく。

＜事務局＞
（資料 1「「第 2 期京都市市民参加推進計画改定版」の進捗管理（案）」説明）

＜杉山座長＞
　フォーラムとしての意見案について，意見があればお願いしたい。

＜佐々木委員＞
　現状の託児や要約筆記の実施数は，審議会等の委員を対象にしたものだったか，傍聴者を対象にしたものだったか。

＜事務局＞

傍聴者対象のものである。

＜佐々木委員＞
資料 9 の市民参加推進フォーラムの市民公募委員募集のチラシの記載は委員向けに託児を用意するものであるが，こういった記載は昨年もあったのか。

＜事務局＞
ご指摘のとおり，資料 9 のフォーラムのチラシでは，公募委員に向けて託児を設けるとしている。これまでの議論や，座長，副座長との話し合いの中で，公募委員の募集についても市政参加しやすい仕組みが必要ではないかということで，今回から新しく加えたものである。

＜内田副座長＞
佐々木委員の発言の主旨は，意見案に「傍聴者募集のお知らせの際に」と書かれているが，「市民公募委員募集」も併記して書いてはどうかということかと思う。
私も，同じように思っている。実績のカウントの仕方も，結果的に託児が 2 件設けられたということだと思うが，募集する際に託児を設けると記載していたというように，傍聴者募集の際にチャンスを設けていたかどうかというカウントの仕方もあるのではないかと思う。

＜事務局＞
今回の調査は，募集段階で用意しているかどうか，をカウントしている結果である。
なお，公募委員の募集要項で託児を設ける旨について定めているものはない。
「託児等を準備している」と会議開催前に広報する審議会も増やすべきと感じているので，庁内周知で増やしていきたいと思っている。
既に，各局区等の部長級が集まる場では周知した。託児については実績のあるサービス事業者を挙げて，文章で通知もしている。

＜杉山座長＞
もう少し，どういう場合に託児や要約筆記等を用意すべきかという点について具体例を出して書いてほしいということと理解した。「会議，ワークショップなど，幅広い取り組みでそうした配慮を設ける」という主旨で記載いただきたい。

＜ハッカライネン委員＞
「やさしい日本語」の意見案の部分についてであるが，誰のためのものか分かりにくいので，「あらゆる人」という記載に関してはもう少し詳しく「外国籍の方，障害のある方な

ど」と例示も記載して欲しい。
「1 万部以上発行の印刷物のうち…」という意見案についてだが，「何らかの」という書き方はあいまいである。「少なくとも『分かりやすく伝えるための手引き』を参考にする」など，具体的に記載してもらいたい。

＜事務局＞
ここでは「何らかの」と書いているが，京都市内部では対応する内容が定められているので，分かるようになっている。資料 4 に示しているが，ユニバーサルデザインの対応内容として 9 項目設けている。9 項目中，1 つだけでも対応している割合を，100%を目指していくということである。

＜ハッカライネン委員＞
1 つだけではハードルが低いと思う。「少なくとも 2 つに取り組む」というのは厳しいか。

＜事務局＞
所管課である障害保健福祉推進室では，まずは 100%を目指そうということで取組を進めているところなので，ご指摘の内容はよく分かるがそこまで書くのは難しい。1 つ取り組めば十分，ということではないとは承知しているので，もう少し踏み込んだ記載にすることについては検討の余地があると思う。

＜ハッカライネン委員＞
ユニバーサルデザインの対応内容である 9 項目中に「多言語版を作成している」という項目があるが，これに「やさしい日本語」を含めてほしい。やさしい日本語は多言語版を作成するよりも簡単だと思う。また，言語の一つだとも思うので，そうとらえて取り組んでほしい。

＜杉山座長＞
では，何らかのユニバーサルデザイン対応をしている割合を 100%にする，というのは，このままでよいということにさせていただく。
他に御意見は無いか。

＜兼松委員＞
ポータルサイトの運営については，何を目的として運営しているのか。また，どういう運営方法で行っているのか。1 日 1 更新でさえ負担になっているという現状はないのか。

＜事務局＞

ポータルサイト「みんなでつくる京都」については，うちの部署が運営している。昔はそれほど投稿していなかったが，投稿頻度をあげてから，フォロワーが増えてきたので，やる意味はあると思っている。

他の部署の SNS 等についても，基本的に担当部署の職員が更新している。

＜兼松委員＞

庁内の情報を集めて発信するので，担当の人にとってはとても勉強になる仕事だと思う。あまり考えずにさらっとやっているのであればもったいないと感じるので，SNS を使って発信することで，何を確かめて，何をもってその発信がうまくいったというのか，など，もう少し戦略を持ってできないのかなと思った。

＜事務局＞

SNS は見よう見まねでやっている部署がほとんどだと思う。ネタ集めや書き方など，苦労しながらやっており，書きぶりもバラバラなのが現状である。

そのため，SNS の種類やその特徴を学ぶような，職員向けの研修が先日開催された。担当者も，せっかくやるのであれば見てもらえるものにしたいと思っているので，今後も引き続き取り組んでいくべき分野だと思う。

＜兼松委員＞

発信する側には，何が良いものなのかが分からないので，色んな部署の良い事例を共有するだけでも効果があると思う。

＜壬生副座長＞

同じく SNS 等による情報発信の意見案についてだが，施策 6 の意見 1 の内容と同様になっているが，施策 1,4,5,8 はデータをもとに行った分析であるので，ここで「アンケート」と出てくると何のことか分からない。アンケートについては，若者対象で行ったものという説明をするか，アンケートという文言をとって，兼松委員の言うように「成功事例を共有する」と変えてしまう方がよいと思う。

＜杉山座長＞

事務局的には「SNS を活用する余地がある」ということを補強するための記述だと思うが，確かに，アンケートと記載すると混乱する恐れもある。

＜壬生副座長＞

SNS については，若者に限らず利用している人は利用しているので，あえて「若者対象のアンケート」と書いて若者を意識した記載にしなくてもよいのではないか。

＜事務局＞
SNS 等による情報発信の項目については，委員の方から関連する発言が無かったので，施策 6 の分析で頂いた意見をそのまま記載した。事務局としては，違う意見としてご指摘いただいた方がありがたい。

＜佐々木委員＞
私は，若者に限らず，情報を受け取った側がどう評価しているかということを常にすいあげていくような取組をしてほしいと思った。「情報を発信し続けるだけでなく，市民側の声を定期的に調査することも検討する必要がある」などと付け加えてほしい。

＜内田副座長＞
兼松委員の発言と合わせると，「情報発信の良い事例を共有することと，発信の有効性についての検証にも取り組む」というようなことだろうか。

＜杉山座長＞
では，「その一方で，アンケートによると」以下の文章については，「SNS を有効に活用する」ということを膨らませて書くということにしたい。

議題（2）「計画を着実に進めるための推進体制」の進捗状況について
＜事務局＞
（資料 5「計画『第 5 章 計画を着実に進めるための推進体制』進捗状況」説明）

＜ハッカライネン委員＞
P1 の取組例 2 に挙がっている「市民協働ファシリテーター制度」だが，どのように利用できるものなのか。私が所属する団体が区役所と一緒に何か事業をやった場合には，使うことができるのだろうか。

＜事務局＞
市の各部署が主体となって企画するワークショップをファシリテーター派遣対象としており，担当部署から協力依頼があれば派遣しているので，一般の方が利用できるものにはなっていない。

＜ハッカライネン委員＞
例えば，市から補助金をもらっている団体は利用できるなど，利用できる範囲を広げることはできないのか。

＜事務局＞
今のところは考えていない。市職員が市民の方と対話していく必要性は感じており，ファシリテーターの数を更に増やしていこうとは思っている。

＜兼松委員＞
結果的にワークショップ型の会議が増えてきたというような手応えは感じているか。

＜事務局＞
客観的な数を比較したわけではないが，担当している我々への依頼の連絡が増えていると感じており，感覚的に増えている気がしている。

＜兼松委員＞
ワークショップ型の会議をやりたくてもできなかった部署が，この制度を利用してできるようになったのであればとても良いことだと思う。

＜事務局＞
我々も，各局区等が，ワークショップをするには自信がなかったり，安心感が欲しいという場合に，ファシリテーターの派遣を要請できるという点は良いと思っている。

＜兼松委員＞
取組１に「各局区・各職場における市民参加推進のマネジメント体制の強化」とあるが，「マネジメント」とはどういうことと考えたらよいのだろうか。「第５章 推進体制の強化」の中心になる取組だとすれば，今挙がっている取組は，内容は充実しているが数が少ないのかもしれないと思った。取組 2 で各局区等の取組が多く挙げられているので，見え方の問題かもしれない。

＜事務局＞
我々の部署が京都市全体の市民参加を推進する部署になるが，京都市全体でみるとすごく少数の部署である。我々の部署だけで全職場での推進状況をみていくのは難しく，京都市では局，区単位で大きく部署が分かれているので，そこに核となるような人，マネジメントをする人を置き，増やしていき，局区等で市民参加を進めようということである。この取組例は，事業よりも仕組み作りに重点を置いている。各区に市民参加課長を置くなども考えられるが現実的には難しいので，まずは，市民協働ファシリテーター制度を設けて運用しているという状況である。
今日フォーラムから頂いた意見も，庁内で共有していくが，そういう情報共有の機会を

増やしていくのもマネジメントの一つかもしれない。年１回局区長級が集まる大きな会議を開催しているが，部長級，課長級の会議でフォーラムから頂いた意見をフィードバックしていくことによって，達成していける部分もある。

＜杉山座長＞
　改めて，このフォーラムがどういう役割を担っているのかということも分かった。
　他に何か御意見等あるか。

＜ハッカライネン委員＞
　京都府には，職員を NPO 団体に研修に行かせるという制度がある。20 時間くらいだが，府の職員が NPO にきて，一緒に活動したり学んだりする取組である。京都市にはそういう制度はあるか。

＜内田副座長＞
　ハッカライネン委員が言っているのは，府の研修制度の一つのことだと思う。職員としての業務時間の数時間，NPO に行って研修をするというものである。職員を受け入れてくれる NPO 団体を探すことから行っている。職員が NPO 団体の活動を体験し，職務に活かすという制度である。

＜事務局＞
　昔から民間企業への派遣は行っているが，NPO 団体に派遣しているというのは聞いたことがないので，現在は無いと思う。

＜杉山座長＞
　京都市にもそうした制度があったらいいということか。

＜ハッカライネン委員＞
　色々ある研修の一つとして，京都市にもあればいいと思う。団体側も，一人来てくれるだけで色々とありがたい。

＜事務局＞
　インターンシップなど，役所に来ていただいて連携するというのはあるが，出向いていくという形の研修はごく一部のものしかないので，確かに，職員にとっては貴重な体験になると思う。

＜杉山座長＞

では，議題 3 について事務局に説明をお願いする。

議題（3）平成 30 年度市民公募委員サロンの実施結果等について

＜事務局＞

（資料 6「2018 年市民公募委員サロンだより」説明）

＜杉山座長＞

今年度の取組を踏まえて，来年度の公募委員サロンをどうしたらよいのか，こういう取組が出来るのではないか，ということについて御意見をいただきたい。

今年度は兼松委員に企画，進行いただいた。ありがとうございました。

私がいたテーブルでは「こういう機会をもっと早くやって欲しかった」という声をよく聞いた。また「もう会議が終わってしまったので，会議の前に参加していたら，もっと違った気持ちで参加できたかもしれない」という声も聞いた。時期をもう少し早くしてもよい。

兼松委員が話しやすい雰囲気で進行されていて，リラックスして進められたと思う。こういう形式は，生の声を聞けてとても大事だと思った。意見が色々出たが，それを次にどう生かすか，ということが次の課題かと思った。

会議に参加する前に研修を受けたいという意見もあったので，公募委員サロンに，そういう役割を持たせてもいいのかもしれない。

＜事務局＞

資料 6 にあるように「モヤモヤする」とご指摘いただいた内容については，こういう内容をしっかり庁内で周知して改善につなげていかなければいけないと思っている。生の声が聴けるので，サロンはありがたい場だと思っている。

厳しい意見もいただいた。会議の開催回数や発言時間など，運営側の問題も大きいのかもしれない。役所としては，市民公募委員の制度を設けたらそれでいいのではなく，やはり中身が大事であるので，中身もしっかり変えていかなければならないと感じた。

＜杉山座長＞

最後に報告事項について，事務局から説明をお願いする。

４　報告事項

報告事項（1）新たに設置された附属機関等について

＜事務局＞

（資料 7「新たに設置された附属機関等に係る「附属機関等の設置・開催等に関する協議書」について」報告）

報告事項（2）市民参加に関係する新しい事業や取組について

＜事務局＞

（資料８「市民参加に関係する新しい事業や取組」報告）

報告事項（3）市民参加推進フォーラム公募委員の募集について

＜事務局＞

（資料９「京都市市民参加推進フォーラム委員公募のお知らせ」報告）

＜杉山座長＞

本日予定の議題，報告事項については以上である。

最後に，今年度任期満了となる大鳥井委員から一言いただきたい。

＜大鳥井委員＞

審議の中で他の方の意見を聞いて，刺激を受けることが多かった。専門家の方が沢山いる中で話しにくいかと思っていたが，意見を言っても受け止めてもらえる空気があって，話しやすかった。まちづくりは市と市民と両方が一緒になってやっていくものだということをすごく感じることができた。

短い間でしたが，ありがとうございました。

＜杉山座長＞

貴重な御意見をいただけて良かったと思っている。ありがとうございました。

５　閉会

＜事務局＞

本日も，長時間にわたり御議論いただき，ありがとうございました。いただいた御意見については，我々もしっかり受け止め，活かして，各局区にフィードバックして結果を出せるようにやっていきたいと考えている。今年度はこれが最後になるが，引き続きよろしくお願いします。

以上